

中川衣子
オーラル・ヒストリー

Oral History Interview with
Nakagawa Kinuko

中川衣子オーラル・ヒストリー

Oral History Interview with Nakagawa Kinuko

インタビュアー：飯尾由貴子、中川直人、池上裕子

2009年3月27日 3

2009年3月28日 31

中川衣子（なかがわ・きぬこ 1920年～2012年）

中川衣子は大正から昭和初期にかけて活躍した日本画家、村上華岳の長女である。アメリカで活躍する画家、中川直人の母親でもあり、今では村上華岳の制作や生活について知る唯一の人間である。本インタビューは中川直人の協力を得て、兵庫県立美術館学芸員の飯尾由貴子を聞き手に迎えて行われた。第1回目では華岳の複雑な生い立ちや実母との関係、パトロンだった中川栄太郎との交流について語っている。第2回目では華岳が使っていた画材や、画家仲間や文学者との交流、亡くなったときの様子について話していただいた。

中川衣子オーラル・ヒストリー 2009年3月27日

宝塚市、宝塚ワシントンホテルにて

インタビュアー：飯尾由貴子、中川直人、池上裕子

書き起こし：関根佳織

飯尾：中川衣子様は、村上華岳画伯の長女として、大正9(1920)年に京都でお生まれになっていますが、お父様について、一番古くに残っている記憶というのは、どういう事柄でしょうか。エピソードですとか、どういう話をされていたとか、一番古い記憶というのは。

中川衣子(以下、衣子)：お父さんとして、画家として…… やっぱ、怖い(笑)。一番は、「怖かった」ですね。

飯尾：やはり制作中には人を寄せ付けないとか。

衣子：滅多に。

中川直人(中川衣子の次男で、村上華岳の孫にあたる。以下、直人)：僕は(聞いた話として)覚えているんですけどね。子供たちが家に学校から帰ってくると、神戸ばあちゃん(注：村上華岳の妻)が「声を出してはいけないよ」と。

衣子：「今日は、朝から機嫌が悪い」って。

飯尾：奥様もかなり気を遣われていたという。村上華岳画伯の奥様も、「制作中はだめですよ」という感じで？

衣子：どうなんだろうねえ。

直人：(神戸ばあちゃんは)泣かされていたでしょ。よく泣いてたでしょう。

衣子：まあね、やっぱり、絵描きの奥さんになるなんて夢にも思ってたみたいやからね。

直人：で、彼女の名前は高木だった？

衣子：あ、実家ですか。うん。

直人：高木佳子…… 高木、なんだったっけ。

衣子：よしの。ひらがなの(注：通称、佳子)。

直人：ぼくはね、神戸ばあちゃん、神戸ばあちゃんって言っていたから。いろんなことを僕が聞いたのは、お風呂なんかに入っているときに、彼女は涙を流して泣いて、ということまで覚えてます。お母ちゃんにそういうこと言うたのを覚えてる。

衣子：言いましたね。

直人：華岳さんは、怒ると何を言うの。怒るとなんか言うでしょ。何を言ったの。

衣子：まあ一人息子だからね、やっぱり我が儘だったんでしょうな。そして、世慣れてないから、出てくる言葉が「ばかやろう」とか「黙ってる」とか、そういう言葉しか出てこないから。とにかくその言葉を連発。

池上：それをお母様、よしの様にもおっしゃったり、子供さんにもおっしゃったり、ということだったのですか。

衣子：いえ、あんまり。子供には直接なかった。子供のほうは、かなり部屋も遠ざけて。私たちには離れというのがありましてね、昔ね。離れに皆おって、「まだ怒ってる」とかね。

直人：喘息のこともあったんでしょうね。

衣子：まあね、体も弱いし。何かというと、精神的にあれして、絵が描けないときでも、不愉快になったときに、みんな自分のストレスから発想してくるから、母にぶつけるより仕方がなかったんじゃないかな。その他にもなんかあったんかも分かんないんだけどね。自分は子供だからはっきり分からなかった。学校から帰ってきたら、足音をなるべくたてないようにして、「今日は体の調子はどうなのか」と。機嫌が悪いと、「朝から今日はだいたい気難しいから、静かにしてたほうがいい」とかね。

直人：これは花隈の家でしょ。花隈の家ですね。

衣子：はあ。

直人：いろいろ聞いたのですが、非常に大きな屋敷だったというのは覚えているんです。

衣子：村上五郎兵衛さん、旧家ですから、500坪位だったね。

直人：池があって、橋があって、すごいとこだっらしい。

衣子：いつも橋を渡って、(そこに) 離れがあるの。そこに子供たちは皆いた。それと勉強部屋も。

池上：では、お父様が制作されているところとは、物理的にかなり離れたところでお暮らしたったんですね。

衣子：全く。それでも、不幸せだとは思わなかった。こういうもんかな、と。みんな黙ってお母さんが言ったとおりにしてましたからね。でもやっぱり、兄なんかは、はっきり分からないけど、横浜の国大に入学したからね。そのときは「逃避じゃないかな」と思ってたけどね。

直人：建築ですね、彼は。

衣子：建築家です。

衣子：でも、私はね、やっぱり長女だったから、少しずつ理解もできるようになっていきましたけどね。私の妹たちは、4つぐらい下と、一番下が10歳ぐらい下。だからもう、まるきり子供ね。

池上：全部で4人兄弟でいらっしゃるんですか。

衣子：4人、はい。

直人：男が一人、建築家の常一郎さんと、娘が3人ですね。

池上：お兄様が一番年上でいらっしゃるんですね。

直人：そうですね。

衣子：はい。

直人：お母さん(衣子)はその時はおいくつだったの、その頃。

衣子：そんなのちょっと覚えてないけどね。

直人：華岳さんが亡くなられたのは、あなたが17歳ぐらいのときでしょ。そやね。華岳が亡くなったときの話をしてごらん。

衣子：やはり喘息、心労からくる喘息だったと思うんです。だんだん自分が16、7(歳)になってきたら、なんでも物が少しずつ理解できて分かるようになってきたから、母の気持ちも分かって、その代わりお父さんの気持ちもよく分かるようになって。だから、よく画室に出入りもするようになりましたね。

直人：許されたの？

衣子：許したということになるのかな。やっぱり最初の女の子やから、自分では可愛がってもらったと思うて、信用されてたと思うて。

直人：ちょっと話がそれますがね。裸婦の絵(《裸婦図》、1920年)があるでしょ、有名な。あれは今どこが持ってる……ここに載ってるかな。(注：『村上華岳』展図録、京都国立近代美術館、2005年、61頁。以下、「図録」と記す。)

池上：今、山種(美術館)が持ってます。

直人：山種が持ってるの。あの裸婦の彼女は、母とおない年なんです。

衣子：大正9年。

池上：はい、そのことも少しお聞きしようと思っていたのですが。そう、(衣子さんが)お生まれになった年に描かれた絵ですよ。

直人：何を考えていたのでしょうかね。

池上：あの有名な裸婦の絵について、お父様が何かおっしゃっていたことというのはございましたか。

衣子：いやもう、あれの制作のときは私は全然知りませんね。

池上：(カタログを差しして)これですね。

直人：これですね。大きい絵なんだ、これ。

飯尾：特定の方をモデルにされていたとか、何か……

衣子：あったようですね。

直人：ありました？

衣子：デッサンみたいな、モデルさんのあれも画集にでてるのかな。何枚かあると思う。綺麗なお方で。

直人：載ってましたね、そういえば。

衣子：どこかの奥さんみたいだったよ。

直人：そういえばそうだ。これだ、この人だ(図録 269 頁を指して)。

飯尾：この方をモデルに。

直人：なるほどね。なんていう人？

衣子：名前は……

飯尾：こちらは、《女の人の顔》(《女の人 婦人像(1-4)》、1919年、図録 269 頁)と書いているだけで、どなたかは。

衣子：どなたかの紹介で……

直人：これ(《裸婦図(下図)》、1920年、図録 268 頁)はどうしたの。

飯尾：これは下絵でして、京都市立芸術大学(芸術資料館)にございます。(華岳が)ご出身になられた学校で。

直人：燃えなかったんだ、戦争で。

飯尾：時々展覧会に出ています。

直人：見たこと無いね、実際に。何点か燃えましたよね、空襲で。

衣子：(これは)燃えてない。

直人：これは燃えなかったんだ。燃えたかと思った。

衣子：燃えたのはね、《聖者の死》（1918年、図録284頁に参考図版掲載）。

直人：なるほど。そういえばそういうのあったね。

衣子：関東震災で。あれは空襲じゃない。関東大震災で。定期画会で、東京へ行って、東京のどっかで焼けたみたい。

池上：では、お父様の生い立ちについてお聞きしていきたいんですけども。

飯尾：お父様の村上華岳画伯は、明治21（1888）年に大阪にお生まれになったんですが、お父様の小さい時のお話をご家族でされたりですとか、お父様自身が幼少時代の思い出をご家族になさったりということはございましたか。どういうお家で育ったですとか。

衣子：あんまり小さかったから、記憶無いねえ。

飯尾：大阪での暮らしがどうだったかとか。

衣子：大阪は知りません。

池上：村上家にご養子に行かれた経緯というのは、皆様ご存知でいらっしゃるのでしょうか。

衣子：華岳の父の…

直人：武田誠三ですね。武田誠三さんが亡くなったでしょ。それは華岳さんがいくつの時？ 8つぐらいのときと違う？

衣子：8歳？ もっと小さかったと思う。

直人：もう少し大きな声で。聞こえないから。（注：ホテルのロビーでインタビューを行ったため、時々周囲が騒がしくなった）

衣子：自分にも聞こえてないけどね。

直人：あなたにも聞こえてない？ みんなでもうちょっと大きな声で。

衣子：だんだんね、やっぱり90になってきたら耳が衰えてきて。

池上：はい、はっきり大きな声で話します。

直人：もう一度聞いてください。

池上：はい、村上家にお父様ご養子に行かれた経緯というのを少しお聞きしたかったんですが。

衣子：そのときには、私はまだおりませんで。

池上：そうですね。

直人：だけど、歴史的には知っているでしょ。武田誠三さんが亡くなられて、僕の記録では、彼（華岳）が7つか8つくらいのおきだったと思います。もし間違ったことを言ったら訂正してください。誠三さんの奥様のたつさんが、非常にお美しい人で、近くの町の若旦那、非常にお金持ちの人だったそうですけれども、たつさんに「結婚したい」と。

衣子：たつさんもやっぱり一人で寂しかったのでしょうか。

池上：武田誠三さんが亡くなられてからという話ですよ。

直人：そうです。

衣子：たぶん、そうだと思います。村上五郎兵衛というのは、わりに旧家なんですけどね。その家に、千鶴（注：千鶴子）という、五郎兵衛さんの奥さんの千鶴さんというのがありましてね。その人の縁続きが華岳さん。甥に当たるんです。だから華岳のおばさんが五郎兵衛さんのところに嫁いでた。

池上：おば様が華岳先生をお引取りになった、というような感じなんですか。

直人：そうですね。

衣子：なんかもう一人、どこかおじいさんで、お目付け役みたいな怖いおじいさんが一人いたね。後から聞いたのには、そのおじいさんが、たつさんがその東（あずま）さんのところに結婚というか、嫁ぎたいと言うたときに、子供をどうするのかとか、そんなことで。随分と村上家でもめたというかね。だけど結果的には、おばさんのところが、たまたま千鶴さんと五郎兵衛さんとの間に子供が無かったもんだから、引き取ってもらったということで、たつさんがお嫁入りできた訳だね。

直人：華岳さんの本当の名前は震一でしょ。その頃は、華岳じゃなかったでしょ。震一でしょ。

衣子：うん、震一。武田震一。

直人：自分の子供を捨ててでも、その若旦那のそこに行きたかったわけか。

衣子：うん…… だから、武田誠三という人がどんな人だったか…… 職業的には図面を引いていた人で、そういうことをちょっと聞いた。

直人：誠三さんが？ 武田誠三さんが図面を引いてた。へえ。

池上：大工さんですか、建築ですか。

衣子：どんな凶面か知らんけどね。

衣子：それで結核みたいので……

直人：で、亡くなったわけ。

衣子：だからたつさんも苦労したかもしれない。

直人：たつさんが二度目に結婚した相手の人、東さんはどんなお仕事していたの。

衣子：私も1回か2回だけあったことがあるのですけど。

直人：どんな人。

衣子：ふっくらとして、ちょっとこう、お父さんみたいな感じの包容力のある人。私は誠三さんを知らないから…… お父さん、ていような包容力のあるような、ゆったりした人だったと思う。震一（華岳）を何とかしなあかんで、ちょうど村上五郎兵衛と千鶴さんの夫婦に子供がなかったもんだから、その子供を引き受けて。それまでにすったもんだあったと思うんですけども、最終的には結婚を許されて、たつさんが東さんのところにお嫁入りして、それで震一は神戸の村上五郎兵衛と千鶴子の養子として入ったのが、7つか8つのとき。

直人：たつさんはその時に親族会議で、「震一を自分の息子と言ってはいけない」と言われた、ということを僕は聞いたことがあるんですけども。

衣子：だから以後、交際はもうできない。

池上：養子に行かれた後はご縁がないものとして。

衣子：だから華岳もお母さんが恋しかったけれども、自分と母親の間は一応もうゼロになってないといかんから、会うことも許されてないし。でも村上五郎兵衛さんと千鶴さんの夫婦のもとでね、しっかり神戸小学校を出ているんですよね。誠三さんの腕が似てんのかなんか、凶面を引いたり、写生しても上手に描けるからね、五郎兵衛さんはこの子は他の事で生計を立てないで、腕でできるようにしたいんと思うんやとって、美術学校に入れたんですね。

直人：だけどこれは華岳さんが画家になってね、観音さんを描いたり（したことと関係がある）。ものすごい心理的な打撃でしょうね。お母さんに、まあ言えば捨てられたんですよ。

池上：一番そういうことをショックに受ける時期でもありますよね。

直人：そうですね、大変な……

衣子：ああいう質（たち）の人だから、随分とその中にはいろんな葛藤があった、ちょっとひねくれていたと思うよ。

池上：それを口に出してはいけないというような状況でもありますね。

衣子：それで義理の父親と母のところでね、あれしたから、一応わがままは通ったけれども、なんかお友達と喧嘩しても、言葉が出ないんでね、世慣れてないから。だけど「お前はばかやろう」とかね、「ばかだばかだ」とかね。だから私が子供のときでも、なにかといったら「ばかやろう」、うちのお母さんも「また始まった、お父さんは『ばか』しか言えない」。ちょっと変わった性格でね、偏執ではなかったけどね、なんかそういう意味でひねくれてるんちがうかなと思うような、難しい人やったけどね。

直人：おまけに非常に病弱だったでしょ、体がね。結局それが喘息になるんでしょうけども。母に捨てられたこと、養子に入ったこと、病弱であったということ。五郎兵衛さんが華岳さんを、京都の絵画専門学校に連れて行ったときに、どう言ったか、学校の先生に。「私の息子が、絵で生計をたてなくてもいいように」とか、そういうこと言ったんでしょ。

衣子：そうそう。

直人：いいお父さんやね、僕にもそんなお父さんいたら嬉しかったけどね。「直人いいよって、絵を描きなさい。絵で生計を立てなくてもよろしい」て言ってくれたら。

衣子：この人（直人）はアメリカへ絵を描きに行く言うたときに、うちの主人は、「お前は一生乞食だ」。「一生乞食だ」と一言。

直人：言われましたね（笑）。僕は「いいですよ」って。

衣子：（直人は）反抗して、「行く」って。

池上：でも最終的には味方になってくださったんですよ。

衣子：そこがやっぱり、本当のお父さんだと思うんですよ。

直人：ものすごい味方になったんですね。その辺が面白いね（笑）。

衣子：でも、東さんとはその後、やっぱりボンボンやったんでしょうね、ちょっと騙されたりしてね。家が逼塞して。

直人：その辺のこと、もうちょっとお話して。

衣子：詳しくは知らないけどね。

直人：だけど一緒に行ったでしょ、華岳さんと一緒に。

衣子：でも震一は母親も恋しいし。そのお父さん（東さん）は多分、今で言うたら仕事で騙されたかなんかでね、不運のうちに亡くなってしまったんですよ。で、娘が二人できて、女の子が二人。

池上：その後、たつさんはご苦労されたんでしょうか、やっぱり。

衣子：たつさんもだから、第二の苦勞がいっぱいあったんと違いますかね。それはね、誰が知らしてきたのか分からないけど、知ってました。

直人：誰が？

衣子：華岳が。

直人：お母さんは娘のときに華岳さんに連れられて、どっかの長屋に行ったわけでしょ。華岳さんはたつさんの生活しているところを見つけたわけですね。その話をちょっとしてください。

衣子：あれは、もちろん村上の母には内緒だったんですけどね。口止めされて。

直人：どういう風に。

衣子：いっぱい電車を何回も乗り換えて、今でしたら、吹田というところ、ありますか。そこだったと思う。

直人：お母さん（衣子）いくつぐらいのとき？

衣子：そうねえ。小学校5年生くらい。路地みたいなところをね。

池上：自分の娘を連れて、幼い頃に生き別れたお母さんに会いに行ったということですか。

衣子：娘を連れて行かないと、自分の健康が、なんどき喘息の発作が起こるか分からない。とにかく私を誘うときは、自分の発作の起きるときに助けてもらうために連れてった。

池上：自分の娘さんを見せてあげたい、ということではなかったんでしょうか。

衣子：違う。（華岳が）山なんか行きたいでしょ、山好きだから。山の中でね、ごーっと風の吹いているとき、下駄をお尻の下に引いてね、ちょっと落ち葉をあれしたら、葉っぱが燃えるでしょ。で、ごーっていう音を聞きながら、ちょっちょっと写生したり。そんなときでも、私が便利だから連れて行く。

直人：薬箱を持っていったんでしょ。

衣子：そうそう、こんなバスケット。

直人：首から下げて？

衣子：はい。私が持って。

直人：それは嫌だったでしょうね。

衣子：それも、電車の中でも発作起きる。

直人：どうするの、自分で治すわけ？

衣子：今はあんな器具はないと思うけど、ずーっところゴムがあってね、こっち側でくっつくと、こう空気を入れてね、そしたらこっちの先に薬の液が入ってて、その液の入った薬を喉のところに当てると、そこから霧のように薬がぱあっと喉にかかってくるわけ。そこらへんを麻痺するのかな。それで（華岳が）「もっときつく、もっときつく」って言うから、一生懸命この……

池上：ポンプみたいになっているところを押すのが……

衣子：こんな小さな風船みたいな、これをポッポッとやるわけ。

池上：それがお役目だったんですね、じゃあ。

衣子：うん。電車の中でもなんどき起こるか分からない。あの人はいつでも、生涯を通じて、学校に行っていない間は、和服。ずっと和服でしたから。寒いときは和服の上に着る、こんなマントしかないわけ。マントって分かる？ 袖がぱっところ付いたような。その中でいつも手をつないで、私がバスケットをこう抱えて。

直人：ということはお母さんが11歳か12歳の頃やね、それは。

衣子：たぶん小学校の高学年くらい。

直人：けどお母さん、そういうときは、その頃は自分の友達と遊びたかったん違うの。

衣子：うん……でもどこかの本に書いてあったけれども、「うちの娘はね、従順な子供だからいつでもどこでもついてってくれる」って書いてたの。使いやすかったの。夜なんかでも、例えば10時頃から「お月さん見ようかなー」とかなんとかって、私たちは離れて妹たちとみんなで寝てると、トントン（注：ノックの音）ってくるわけね。「さんぽー」って。

直人：そう、そんな遅くに。

衣子：そしたらお母さんが飛んできて、「やめて下さい、今子供は、学校の試験やからね、やめてください」言うても、言うこと聞かないから。で、私はお父さんの味方。「行くよー」って。で、二人で。マントの下でね、お手々つないでね、ずーっところあちこち散歩する。

直人：何、山に行くの？

衣子：そういう時はほとんど元町。

直人：閉まってるでしょ。

衣子：でも開いてるところもあるの。ずーっところ端から端まで。神戸の端から端までって、一番端っところが三越で、こっこの端っところが大丸。で、「うちの娘は従順や」って言うてる。

直人：誉めてはんの（笑）。さっきのたつさんのところに行くとき、ぐるぐる電車乗って路地を歩いて……

衣子：多分あれは吹田というところやと思うんです。

直人：そこで家まで行ったの？ たつさんの。

衣子：行きました。

直人：たつさんに会いました？

衣子：うん。そのときは、駄菓子屋さん、お菓子屋さん……

池上：お菓子屋さんみたいなものを営んでいらした。

衣子：旦那さんが不運の中に亡くなったからね。路地の突き当たりみたいな並びで、ちょっとお菓子をよばれたり。そのときは向こうの女の子が二人で、お母さんと三人。でも華岳を見たら、三人が寄ってね、いつも泣いてた。その娘さんも、「お兄さんだ、お兄さんだ」って……

直人：華岳さんはお金なんかあげたのかな。たつさんに。

衣子：必ず白い包みでね、あげてた。

直人：あなたにも、華岳さんなんかくれたん。

衣子：そんなんもらわないよ。

直人：口止めなんかしないん。

衣子：大人しいから言うこと聞くんよ。

池上：信頼されていらしたということですよ。

衣子：でももう、とにかくお母さんと娘さんと、三人で。お母さんも「震一一」言うて、「許してな、許してな」って。いつも自分自身もちょっともらい泣きしていたね。そこの娘さんは「お兄さん、お兄さん」って。

直人：これが僕は、華岳さんの観音やと思うの。失った母の愛だとか。

衣子：バネになってるんやと思う。

直人：絶対そうですね。僕はいつでもそう思うねん。女性の、母のイメージというのかな。それがひとつの、彼の原動力にもなっているんでしょね、画家としての。

衣子：だから私、なんか気の毒な事情があるんだろうなあと思って。それで帰るときにお菓子なんか、ケーキなんか食べさせてもらってね。家に帰ってきて、「お母さんに言ったらだめよ」って言われたら、ちゃあんと一生懸命きゅっとして（口をつぐんで）。

直人：それが口止めだよ、ケーキだよ（笑）。

衣子：言わなかった。

直人：言ったら叱られる？

衣子：いや、もめると思う。

直人：華岳さんは秘密で会いに行ってるんだ。

池上：かなり何度も行かれていたんでしょうか。

衣子：いや、そんなに何度も行けませんでしたね、体も弱いからね。（衣子さんは華岳に）「また行ってくれる？って言うたら行くよ」って言うてましたね。

直人：華岳さんはあなたが17歳ぐらいのときに亡くなったんですけども、今聞いていた話では、あなたが11歳か12歳ぐらいのときから、たつさんのところに行ったわけでしょ。一番最後に行かれたのはいくつぐらいのときですか。本当に娘になった頃？

衣子：なりかけくらい。向こうも同じくらいの娘さんでね。意外とそこの娘さんはね、綺麗。たつさんもね、日本人離れした顔。目が奥目で、外国の人ね、っていう感じの。

直人：美人だったの。

衣子：痩せて細い人やったけども。むちゃくちゃひどい顔じゃなかった。だから娘さんも、女の子もみんな綺麗だった。お父さんははっきり知らないけど、その東さんの家系は、綺麗な人が多かったと違うかな。それでも、最後に華岳は、あるとき本当に15分か20分くらいで急に亡くなったんですよ、夜中に。それでぱっと新聞に出たから、たつさんはその娘さん二人連れていらっやいました。

池上：お葬式にいらしたんですね。

衣子：だけど、村上家の新宅は、付き合いはもうこれ（禁止）になってたからね。一番困ったんは母で、でも別室に入れてあげて、お別れに来た人が切れたときに、親子三人入れてね、最後の別れをやったことを覚えています。それで、それが済んで、もちろんお葬式にも呼べないし、帰られるときに裏の勝手口を開けてね、そこからお帰り願った、そんな記憶があります。

直人：華岳さんの葬式ってすごく綺麗だったそうですね。

衣子：もうシンプルにね。

直人：たくさんの方が来たんでしょ、花を持って。

衣子：親子三人で来てはって、それからもう、全然お付き合いしないし。村上の方も、息子の代になって、（私の）兄やね。兄も東さんのことなんか知らないからね。やっぱりタブーになってるからね。多分もう交際もしないし、

それっきりになってるから。時々「どうされてるかな」なんて思うけど、まあお母さんはもういらっしやらないと思うね。

直人:そしたら、たつさんがいつ亡くなられたとか、そんなことも全然知らない？ 彼女のお墓がどこにあるっていうのも分からない？

衣子:分からない。

直人:ああ、そう。やっぱりちょっと悲劇やね、そういうのは。

池上:双方共に、お気の毒なところがありますね。

衣子:でも、すでに生い立ちのときから、いろんな目に遭ってるでしょ。だから考えたら、今の子でね、神経質でぴりっとした子がいるじゃない、あんな子供じゃなかったのかな。

直人:割とませてたということは？

衣子:自分でよく言ってた。おませ。ませてたって。

直人:土田麦僊(1887-1936年)かなんかがそんなことちょっと言ってたですね。

衣子:一番おませやったって。

直人:そういう人生を通ってきて、小さいときから、そういうおませっていうのかな、人生観ができたんだろうな。

衣子:養子にきたら養父母がおりますね。村上は一応旧家で通ってたからね。でも五郎兵衛さんは震一を可愛がって。ちゃんと家督も残して亡くなったからね。それで幸せだったんだと思うんだけども。

直人:乞食にならなくて。そうでしょ、画家として、ちゃんと絵が描けたんでしょ。他の入江波光(1887-1948年)さんとか、他の人たちは大変な生活だったと違う。

衣子:(華岳は)何も働いてへんもん(笑)。

直人:あ、そう。

衣子:だから時々ね、今の若い子達でね、気分の難しい子供ありますね。一つ間違ってたらどんな人生を送っていたかわかんないと思うね。

飯尾:お父様にとっては、絵を描くことが自分を表現する唯一の、自由に自分の心を解放できることだったんでしょうか。

衣子:そうでしょうねえ。

直人：絵が上手だったんでしょ、最初から。

衣子：誠三さんが図面引きだったというのは、どんな図面を引いていたのかわからないんですけどね。

直人：どういうことなのかな、図面引きってというのは。

衣子：昔の図面引きがどんなことをしたのか。

直人：やっぱり建築家的なことしたんじゃないかな。

衣子：兄が横浜の国大を受けるときに、建築家を狙って行きましたからね。で、県庁へ就職して、建築の方やってたからね。やっぱりそんな血が引いていたんかなと思うけど。

直人：僕はそれ、よく覚えてるの。おじさんの六甲の家に行くと、ブルーの建築の紙がたくさんあって、もう図面引いてあるわけよ。それをよく覚えている。ものすごくいい人やったね、そのおじさんってというのは。華岳さんと似ていてね、同じように死んだんだな、やっぱり喘息で。

衣子：病気だけはね、間違いなく直系のどこへみな行っちゃって。私らについては、喘息は上のほうを飛んでっただけだね、兄だけはしっかり喘息だけもらってるから。

飯尾：ちょっとお写真がありましたので、見ていただきたいんですが。カタログにあったものを複写してきましたんですが（図録 293 頁、右）、こちらが、大正 14（1925）年に聖拙社という華岳のお弟子さんたちがグループを作って展覧会をするというところで、その会場なんです。

衣子：これ私だ。

飯尾：はい、写ってらっしゃると思って。ちょっと不鮮明なんです。

衣子：それでね、家でお寺を借りてましたでしょ。形見代わりに、家で若い人を育てて。この人ら皆、お台所で、お買い物して自炊して、寝泊りして、ずっと一緒に住んでた。

飯尾：お寺で合宿生活のような。

衣子：はいはい、だからこれは私ですけれども。

飯尾：こちらがお兄様でいらっしゃいますね。

直人：常一郎さんやね。

衣子：いろんな人にお守してもらった。

飯尾：（華岳は）非常にお弟子さんたちの面倒とかご指導というのはよくされてたんですか。

衣子：子守もやってくれてたみたい。

飯尾：お弟子さんたちが？　そうですか。

衣子：はい。私もよくね、この中の人は、何人かはみんな子守。

直人：名前知ってます？

衣子：知ってます。この人だけ分からへんけど。これは坪井（泰治）さん、これは藤村良一、それから一つ飛んでこれが毛利三郎。そしてこれが……

直人：これ女の人やね。

衣子：男です、これ。石川（利治、1901-1980年）さん。

直人：それが石川さんか。だけど女の人みたいやね。

衣子：この人は毛を伸ばしてて、黒いワイシャツ着てて。

直人：この後ろにかかっている絵は、これ何ですか？

衣子：そうねえ、何だろう。こんなグループを作ってたって？

飯尾：はい、聖拙社という。聖人の聖に拙いという字に社、というので、お弟子さんたちのそういうグループだったそうです。

衣子：もうほとんど亡くなりました。

飯尾：こういう展覧会などに衣子様などお連れすることは。

衣子：お守のつもりで連れてきたのかな。

直人：この中では有名になった作家はいますか。

衣子：学校の先生になった人が一番多いね、絵の先生ね。この人がなんか養子に行って、この人が兵庫の県立の女学校の絵の先生になって。この人も絵描きさんに。で、この水上哲というのが……

直人：この人？　タバコ吸ってるの、これ。

衣子：これがね、ちょっとはぐれもんだったから。

直人：そういう感じやね。ちょっとぐれた感じやね。

衣子：時ともなく現れて、ご飯食べて帰ったり、そういう人です。で、坪井さんとかは養子に行って。神戸ホテルかどっかの。

直人：こういう人たちの絵は残ってますか。

飯尾：藤村良一さんから、作品と言いますか、スケッチのようなものを資料としてうちの美術館（兵庫県立美術館）で預かっています。

衣子：この人が一番活躍したかな。藤村良一。

直人：僕は会いました、この人。風景画描いてたね。オイルしてたん違う。油絵を憶えてんねんけど。

衣子：この石川さんも仏画を描いてた。

飯尾：お弟子さんのご指導をされながら、ご自分も絵を描いていたという。

衣子：そうそう。

飯尾：お忙しい毎日ですね。

衣子：昔はそんなんでね。あちこちのご家庭から（弟子を）お家に預かってね。母が言うてましたけど、みんなめいめい夕方に買い物に行って、お台所をあてがってるから、自分の好きなものを、作って食べてた。

直人：奥さんなんかもいたんですか？

衣子：このときはみんなまだ独身。結婚した人はみな外へ出てくけど、みな若いから。

直人：どういう風にして華岳さんは彼らを見つけたのかな。どういう出会いでお弟子さんになったのかな。

衣子：そういうのは、どなたかの紹介かな。

池上：みなさんと共同生活をされてたんですね。それは花隈のお家の近くでされてたんですか。

衣子：いや、これは京都に借りてました。

直人：花隈は最後の10年くらいでしょ、移ってきたのは。

衣子：だから、この坪井さんっていうのがね、私の面倒よく見てくれて。母が「ぐずってるから」と言うと、「ほな僕が散歩つれていきます」って散歩に連れて行ってきて。ちょうど圓徳院（注：高台寺の塔頭のひとつ）というお寺のところに、昔の天皇陛下の御陵があって。閑静なところで、非常に環境のいいところやったから、よく面倒見てもらった。で、この人が「今度来るとき、お兄ちゃんがあなたの好きな本、買ってきてあげるから」って。それで初めてナイチンゲールの本を。

直人：それがナイチンゲールか。なるほど。

飯尾：京都時代はこういうお弟子さんたちとにぎやかに過ごされていて、それから芦屋に転居されて、生活は

かなり変わりましたか。お子さんたちにとっても。

衣子：そうですね。みんな初めは絵を志してたけど、みなそれぞれ違う道に。この人なんかは、京都の染めものやさんに。

直人：これは何年の写真ですか。

飯尾：大正 14（1925）年となってますね。ちょうど衣子様が 5 歳か 6 歳位のときぐらいのときでしょうか。

衣子：珍しい写真ですね。

直人：そう、大正 14 年か。

衣子：みんな京都の美術学校出てる。

直人：華岳さんが 37 歳のときだ。（図録を見ながら）これを描かれたんだね。既に菩薩を描いておられる。

衣子：みんな絵を志してて、あんた（直人）みたいなもんだ。でも全部、絵描きだけになった人は、この石川さんと、藤村さん。

飯尾：少し仏画についてもお尋ねしたいんですが。こういった仏様の絵につきまして。独特な表情の仏画を描いてらっしゃるんですけども、インスピレーションを得た特定の仏像とか、そういうものはあったんでしょうか。この仏様が好きだとおっしゃっていたりとか、そういうことはありましたか。こういうお顔はあまり例を見ないような……

直人：それはね、この画論（注：村上華岳『画論』、弘文堂、1941 年初版）のどこかにこういうこと書いています。「私の観音とか菩薩というのは、どこの特定のものからもインスピレーションを受けていない」と。なにか自分の中の、内面的なイメージですよ。彼はインドの文化にすごく惹かれていたでしょ。これは母に聞いたんですけど、当時神戸にはね、インド人の人たちが相当来ていたんですよ。

衣子：神戸の山手の方に。今もありますでしょ。（北野に）ずっと残ってますね。あそこに、お友達ができたんです。ハッサン・アーリさん。

池上：インド人のお友達ができたんですね。

衣子：大丸百貨店に行ったときに、ちょうどお盆前で、大丸さんの仏具の部でね、提灯がいっぱいぶら下げてあったの。アーリさんは提灯が珍しいねん。提灯は紙で作って、こうなるでしょ。一所懸命奥さんと見てて。私も一緒にいたんですけど、気になってしょうがなくて。お父さんが話しかけて。

池上：提灯の説明をして差し上げたんですね。

衣子：なんかこう（ご縁が）できて。うちの父は、インド人の顔が一番好きなの。それは分かってました。京都におったからね、舞妓さんの顔が好きなんかなと思ってたら、インド人の顔が大好き。だから一番「えっ」て思ったのは、阪急電車乗ってね、マント着てね、ここに手をいれているわけ。ここにメモが入っているんです、

鉛筆と。前にインド人の綺麗な女の人が出て。綺麗でしょ、東洋的で。目の前では写生できないから、こうしてね、鉛筆で目のアイラインかなんかをね、一生懸命ポケットで……

池上：マントの中で、写生をしてらしたんですね。

衣子：中で、鉛筆で。それで着いてから、「あつだめだ」って言って。「全然だめだ、あんたに似てるわ」って言うて（笑）。

池上：すごく気遣いが細やかな。

衣子：そのアリさんと会えたことで嬉しくてね。インド人は神戸の北野町の辺りに住んで、家族と一緒に貿易してたんね。それで話をしたら「いらっしゃい」と言ってくれて、家族みんなで押し寄せてご飯呼ばれて。それで神戸の山手6丁目いうところに、青年会館があったんですよ、煉瓦建ての。戦争で（今は）ないけど。そこで若者のためということで、(ラビンドラナート・)タゴール(Rabindranath Tagore, 1861 - 1941年)さんという方を、日本の青年会が呼び寄せて講演なさるような話を誰かちらっとして。それで青年会館の講演会を見に行きました。

池上：インドから来られたタゴールさんの？

衣子：タゴールさんの、一日だけの講演。それで父が「写生させてくれ」って。直筆の写生が今、村上の家にあるみたい。（《タゴール像》、大正13(1924)年、2005年図録、292番、270頁）。

直人：いい素描画だよ。ものすごくいいね。だけど、タゴールさんをもっと理想化した顔だね。タゴールの写真と比べると華岳さんの素描はね、ダ・ヴィンチ(Leonardo da Vinci, 1452-1519年)的な感じやね。

衣子：いろんなミックスとか先入観がね。それでアールさんに「また一遍会えないか」って言うて、「またいらっしゃい、いらっしゃい」言うてくれて。自分のところにはいっつも呼んだことないんですよ、向こうばかり（笑）。また行くとね、インドのご馳走が美味しいのよ。ちょっと辛いのを、ちゅちゅと袋に包んでね、カレー粉みたいのが入った、ちょっとお蕎麦に似たのと食べたら美味しい。その時の話でね、私は知らなかったんですけども、華岳もインド人のこと非常に研究していたから、東京にチャンドラ・ボース(スバス・チャンドラ・ボース(Subhas Chandra Bose, 1897-1945)さんという人が、迫害を受けて、東京のお菓子屋さん(注：中村屋)にかまってもらいはったことがあるんね。

直人：そのころ、何かあったんですよ。

衣子：何かあったと思う。

直人：知識人とかね、そういう人たちがインドの国内で、英語で言うと persecution。

池上：迫害をされた人たち。

直人：そう、何かあったんですよ。インドのそういう人たち、一般的には裕福な人たちが神戸に逃れてきたんですよ。

衣子：東京のね、かき餅みたいなん作ってるとこのご夫婦が、自分とこの離れを開放して、ボースさんが逃げてきたんでかくまってたいう話を、アーリさんと一生懸命話してね。うちのお父さんもインド大好き人間だったからね、アーリさんとこ行くときは、嬉しくて仕方がない。なんとかしてサリーの服を一枚欲しいって。「どうするんだい」って言ったら、「自分の娘に着せる」って。それで一遍着せられたことがあるの(笑)。全然似合わない。顔が日本の顔だから。

直人：ここ(額)にこう赤いの付けて？

衣子：ちょっとつけたかもわからないね。神秘的なんだって、あれが。

池上：この裸婦の身に付けているものなんかも、少しサリーみたいな雰囲気か。

直人：そうですね。

池上：『画論』なんかをお読みしていると、すごく深い精神性のある文章を書かれています。華岳先生は、ご自分は宗教家であるという意識はお持ちだったんでしょうか。

衣子：いや、あんなこと言うてるけどね、母なんかが言ってたのは、家にはちゃんとお仏壇もあるし、(家族は)盆暮れにはお墓参りもするけど、(華岳は)一回も行ったことない。

池上：行ったことないっていうのは。

衣子：こんなん(お参りのジェスチャーをして)しない。

池上：仏壇の前でお経をあげたりですとか。

衣子：しない。口で唱えるばかり。

直人：僕が理解するのは、華岳さんは形式ばった、そういうものに対しては(懐疑的だった)。というのは、彼は密教をすごく研究していて、仏教に加入しようと思っていたらしいんですよ。だけどその前の日にキャンセルしたんです。『画論』の中で話しているのは、自分は仏教には非常に惹かれるんだけど、仏教が余りにも人間の身を軽蔑したような、そういう見解に私は反対するっていう。余りにも精神界のことを主張しすぎていると。だから彼の絵を見ていると、僕も絵かきですけど、すごくセクシーなんですよ。

衣子：うん、ある。

直人：そうでしょ、なまめかしいでしょ。そうすると仏教で言っていることと、自分の考えていることと、ちょっと違うと思うの。彼は非常に、仏教なんかは懐疑的に見ていたと思います。

衣子：だから、こんなかなり豊満な肉体でね。

直人：ものすごいセクシー。

衣子：だからそういうことは意識してないというのが、絵に現れている。お盆であろうが、お父さんの命日で

あろうが、自分のお世話になった五郎兵衛さんのお墓参りもしないし、絶対、なにもしない。

直人：だから彼は形式的な考えに対しては、反抗児だね。国画会（注：国画創作協会）っていうのを作ったのも、そういう establishment（制度）に対する反抗でしょ。

飯尾：「絵を描くことは祈りと同じだ」というもことも述べてらっしゃいますけれども、そういう言葉は日常、口にされることはありませんか。

衣子：心の中じゃないかな。

直人：制作前に自分で瞑想して。

衣子：瞑想はずっとやってましたね。それも形式にとらわれないで。

池上：瞑想をされてから制作をする、というような順番だったんでしょうか。

衣子：一日のうち、半分以上はベットの上。その半分の残りの、半分の半分ぐらいが絵を描いているとか、後の半分は苦しんでるとか。

直人：ものすごく苦しんだよね。顔見たら分かるわね。

池上：『画論』で書かれているようなことも、そういう苦しみの中から綴られたというようなところもあるんでしょうか。

衣子：そうやねえ。

直人：良いこと書いてるでしょ。僕のアメリカの友だちなんかに、ちょちょっと訳すんですよ、みんなおんなしこと言うんですよ。「直人、これを翻訳してください」って。だから富田玲子さんにやってもらおうかな、と思って。

池上：結構、普遍的な、胸を突くようなメッセージがありますよね。

直人：そう。なんか、カンディンスキー (Wassily Kandinsky, 1866-1944 年) のスピリットのやつあるでしょ (注：カンディンスキー『抽象芸術論—芸術における精神的なもの』、初版は 1911 年)。あれよりもこっちのほうがずっとええと思うねん。

池上：ご一緒に暮らされていて、こういうことをご家族に話すということは、やはりなかったんでしょうか。

衣子：でも結構ね、私たちが親を批判するとおかしいけど、「随分勝手よねー」なんて姉妹でぶつぶつ言ったりね。「お母さんも良く泣かされてるんだから」って。お風呂入ったら涙のつもりで顔をばーっとこう洗って、「あれみんな涙よ」って言ってたね。それで父は、言葉が何も言えないんじゃないの、ぱっと適切な言葉が出ない。出なかったらもう「ばかやろう、お前は何も分かってない、ばか」って、そればかり。だんだんこう（癩癩が）出てきたら地団太踏むくらいやね、子どもみたいやね。母もだんだんそれが分かってきて、大きな赤ちゃんをかかえているからね、って。

飯尾：先程、紙の話がされていたかと思うんですが、お好きだった紙とかは。

直人：ペーパーですか。

飯尾：特定のお好みの画材とか、お好みの表具とか、出入りの業者さんですとお気に入りの表具屋さんとか画材屋さんとかいうのは。

衣子：いい物を使ってるとか？ それはね、(土田) 麦僂さんのとこと仲良しでしょ。麦僂さんは、ずっと家が近くで、道具屋さんとかね、画材屋さんが、ええものを持って来てね。土田さんは上等なもんが好き。震一は安もんでもええって。

直人：筆も？

衣子：みたいよ。

直人：安もんで描いたん。

衣子：そうそう。あの人の筆はね、ちょっとこう、チョンチョンと先を切る。ちょっと先を切って、こうかすれたら一番いいんですよ。

池上：特にこだわりはお持ちじゃなかったんですね。

衣子：何でも良かったみたい。

飯尾：墨などはどうですか。墨一色で描かれていたりとか、朱で線を描かれたりとかしてらっしゃいますけれども。墨とか絵具の色合いにはかなりこだわってらっしゃったんでしょうか。

衣子：道具なんかほとんど、ええもんは使ってなかったみたいよ。

飯尾：晩年になられると墨一色で、本当に抽象画みたいな、そういう山の風景とかをお描きになって。

衣子：唐紙(とうし)が多いですね。この黄色いのね。

直人：唐は中国の。正確な名前があるんだよね。何とか唐紙っていうんだっけ。

衣子：白唐紙(はくとうし)いうのもある。これの白いのもある。でもこの黄色が好き。

直人：これは安い紙だよな。どっか神戸の三宮でこういうのを買ったんだろ。そうでしょ。

衣子：そやと思う。

直人：ちょっとこう、青っぽいね。墨にちょっと青なんか入れてるんだろうな、きっと。

衣子：それをお皿で溶くのは、やっぱりお母さん。

直人：ああそうなの。神戸ばあちゃんがこうやって。

衣子：言われる通りに。私はしたことない。

直人：それはいつごろ描くの、朝のうち、お昼、夜とか。

衣子：夜、更けてから描くの。

直人：この海の、《味爽ノ海》っていうのだな、これ（1919年、図録54頁）。これなんか、昨日も聞いてたんですけどね、（華岳は）よっぽどこの絵を気に入ってたらしいんです。何度も時々出して、色をちょっと入れて、すっとしてぱっと終わったんじゃないかと、何度も何度も手を入れたんだな、これは。よっぽど気に入ってたんだ。

衣子：だから手に入れた方がね、半日かけてね、つつつとこう。

直人：手に入れたって中川さんやん。中川栄次郎でしょう。

衣子：そうそう。

池上：これは中川栄次郎さんのコレクションに入っていた。

直人：そのストーリーもすごいんですよ。素晴らしいですね。栄次郎さんと華岳さんの出会いというのかな。

池上：そこのお話をお聞かせ頂いてよろしいでしょうか。

直人：じゃあね、栄次郎さんの話をして、それで一応今日は打ち切った方がいい。あんまり疲れたらいかんから。で、栄次郎さんと華岳さんはいつごろ会ったんですかね。

衣子：そんなん、知らないけどね。私が知ったときはもう交際が始まってて。

直人：僕は（華岳について）オレゴンのポートランド美術館（Portland Art Museum）で講演をしたんですよ、1年半前に招待を受けて。僕はオレゴンとかシアトルのことを、全く考えたことがなかったんですけども、オレゴンに行くと、あそこは第二次世界大戦のときに、日系アメリカ人の強制収容所があったところなんですよ。僕は全然知らなかった。オレゴンをワイフと子どもたちとドライブするでしょ。そうすると日本人の持っている、あるいは持っていた農場があるんですよ。今でも残っているんですよ。そういうのを見ているうちに、日本人と西海岸との関係がだんだん僕には分かってきたわけよ。シアトルはもっと日本人の跡があるんですよ。僕がレクチャーで最初にお話したことはね、栄次郎さんのこと。彼は、大阪の米の商人の子どもだったんだよね。

衣子：お米の間屋さん。

直人：間屋さんですよ。兄弟が非常に多かった。

衣子：10名。

直人：10人おったのかな。栄次郎は、自分のお父さんお母さん、兄弟を見てですね、「自分はお米の商人になりたくない」と。18歳のときに、両親の家の近くに禅寺があった。禅寺の和尚さんが、その若い栄次郎を見てですね、何か感じたんでしょうね、栄次郎に「栄次郎、アメリカへ行って来い。お金をあげるから」って。片道の切符のお金をもらったんですよ。それでシアトルに行った。当時1904年くらいで、ちょうど日露戦争の頃です。その頃、日本人、わりといってるのよね、西海岸に。

衣子：私らが小学校のときね、神戸でしょ。だから神戸港からね、ブラジル移民の船が一年に何回か出てました。

直人：ブラジルにね。だけどこれはアメリカ西海岸。それで彼はシアトルあたりに2年くらいいたんですよ。アメリカには全部で10年いたんですよ。シアトルあたりに2年いて、18歳でしょ、人種偏見がまだ非常に強い頃だったから、大変な時期だったと思うんだけど、彼は結局ニューヨークに行くんですよ。そこに8年いて、貿易というのを考えたんだろうな。いろんなお客さんを作っというて、8年いて、栄次郎さんのお父さんが非常に病気だという連絡が入って、神戸に帰って。1904年から10年で、1914年。第一次世界大戦の間近ですよ。帰って、神戸商会株式会社というのを作ったんですよ。それでアメリカから日本の女性を美しくするものをいっぱい輸入したんですよ。口紅だとか、イヤリングとか。

衣子：アクセサリ。

直人：アクセサリ。カルチャーパールとか、ハンドバッグとかいっぱい。で、彼は大金持ちになるわけ。お金持ちになると、大体、大きな家を建てる。家は今度建て直しするんですけどね。家を建てて、今度は骨董を集め始めた。他の絵描きさんの絵も集めたそうです。ところがたまたま、彼は華岳さんの絵に出会うんですよ。すごい衝撃を受けたそうです。それ以後、自分の持ってる他の絵を売っちゃって、華岳一辺倒になるわけ。華岳さんの絵をもういっぱい集めるんですよ。その辺の話もうちょっとしてください。

衣子：(栄次郎は)私の主人の父です。10人兄弟で、お米の間屋(といや)さんです。昔の大阪の商業学校に通ってた、次男で。長男と違う、次男です。「ゆくゆくは自分もお米屋さんになるのかな」と思ってた。商業学校から帰ってくるなり、親は「どこそこの配達があるからお前行ってくれ」って、長男にも行かせる、次男にも行かせる。お米屋さんの間屋さんで大変で、だけど栄次郎さんは、これはええことで家のためにはなるけれども、これをやってたら、10人兄弟の次男で、自分は生涯米屋。夢がないわけ。そのお寺の方に「何かやりたい」って打ち明けて。いい人に巡り会えたんやね。もらったのか貸してもらったのか、資金をもらって、それをもってね、18歳ぐらいのときに単身、船に乗って。

直人：それ、僕とものすごく似てるね(笑)。僕も18歳でニューヨークに行ってね。

衣子：でもね、向こうで、シアトルかどっかで、平尾さんっていう、その頃貿易してる人がおって、そこへ就職してん。「平尾さんは、終世自分の先生や」って言うてはって。

直人：栄次郎さんにとってね。習ったんだな。

衣子：それで、平尾さんはアメリカにお店持ってたけど、神戸にも会社持ってた。こっちへ帰ってきたときに、また平尾さんとここで就職した。

池上：そこでビジネスを学ばれたという感じだったんですね。

直人：片道の切符のお金をくれたのが、この人じゃないかっていうのは。

衣子：おじいさん。玄道さん。中井玄道さんいう。

直人：(写真を見ながら) この人が分からないんですよ。その禅僧はこの人じゃないかと。

衣子：中井玄道さんという人やと思うんです。いつも酔ったときはこの人と呼んでた。

直人：栄次郎さんは華岳さんの絵を集めて。だけどそれ以上に人間的に。同じ誕生日って言ってたん違う？
同じ年に生まれたとか。

衣子：いや、ずっと彼の方が若い。だけど、馬が合うってものの。(あと、華岳の蒐集家といえば)株屋さんですよ。
石野(貞雄)さん。石野さんと会ったのは林松竹堂で……

直人：石野さんて、それは誰？

衣子：華岳会のメンバー。

直人：石野さんを通じて華岳さんに会ったわけ、栄次郎さんは。

衣子：いや、林松竹堂(はやししょうちくどう)。夜散歩に行くでしょ。元町に林松竹堂という書画屋さんがあって、そこでいつも椅子に座ってた。

直人：誰が？

衣子：華岳が。そこの亭主と。そこへ石野さんという人も来るわけ。それで出会いが。で、石野さんはもう、
純粹の株屋さん。

直人：だけどやっぱりコレクター？

衣子：コレクター。

直人：華岳さんの絵を買ってたわけ？

衣子：そう。何でか知らんが、虫が好くっていうのかね、その石野さんとも緊密な仲に。

直人：この写真に入っていますか、その石野さん。

衣子：いない。

直人：ここには入ってないね。

衣子：これは絵描きさんばかり。その頃、他のいろんな絵を集めてたわけやね。

直人：この写真を見たら、彼はほんとインド人そっくりやね。僕にもインド人の血が流れているんだ（笑）。

衣子：お父さんと私が歩いていたら、人が見る。「あっ妙な親子やなあ」って。電車に乗ってもみんながこう見て。

直人：非常に変わった顔だもんな。

衣子：目が奥目。これは吹田のお母さん似よ。吹田のお母さんも奥目。面白い顔やね。

直人：面白い顔してる。ものすごく面白い顔してる。華岳さんと中川栄次郎さんとは、一つの宿命的な友達だったね。で、華岳さんの長女と、栄次郎さんの長男が結婚したんやね。

衣子：栄次郎さんがね、私を好いてくれたの、お父さんが。息子はどうか知らんよ（笑）。

池上：華岳画伯がお亡くなりになってから、ご結婚をされたんですよね。

直人：あなたがお父ちゃんと結婚したときは、華岳さんは亡くなられていた。

衣子：死んでました。亡くなってからね、栄次郎さんという人に、私はものすごい父親の像を見るみたいに。とっても何もかも備えたような良い人だったもんで、どんどんそのお父さんに惹かれて。ああいうお父さんの形もあるんだなって。良いお父さんだあって。月に一回必ずお参りに来てくださってね。自分で第二のお父さんみたいにね。栄次郎さんもものすごく可愛がってくれて。なんとなしに向こうの息子、うちの主人と、なんかそういうことに。

直人：戦争中でしょ、結婚されたんは。

衣子：まだ大学行ってた、主人は。

直人：在学中に結婚されたの。そう。もう戦争始まってた？

衣子：始まってました。

直人：華岳さんは1939年に亡くなられたんだけども。

衣子：あのときは支那事変があった。支那とごそごそやってた。

直人：関東軍がやったことやね。

衣子：そうそう、満州の取りあいっこをやってたんだな。

直人：いちゃもんつけたんだよ、戦争したいから。結婚したのは華岳さん亡くなられてから何年くらいあと？

衣子：その翌年くらい。

直人：1940年か。

衣子：栄次郎さんが私を可愛がってくださって、「うちに来てくれ、来てくれ」って言われて、仕方がなしに言ったらいけないけど。お父さんは立派な人やった。

直人：昔はあんまり恋愛で結婚するということはなかったのかな。

衣子：ない。

池上：こういう立派なお父さんの息子さんだったら、ということで。

直人：結婚したわけだな。

衣子：お父さんにしたら、うちの主人は東大まで行ってたから、自慢の息子さんだったんやろうね。「どうだ、家の息子の嫁になってくれんか」なんて言ってたけど、ちょっと繊細なところがない（笑）。

直人：豪快すぎたね、ちょっとね。

衣子：野球やってね。

直人：武道するしね。

衣子：柔道やって。

直人：黒帯やしね。すごい人間やったね。恐ろしい、ばけもんだな。

池上：華岳さんとはぜんぜん違う感じで。

衣子：違うた。

池上：対極にあるような感じですね。

直人：ほんとそう。栄次郎さんはやっぱり、顔をみても、すごくジェントルマンっていう感じやね。相当苦労したから、そういう味が身にしみてると思うの。非常に絵の分かった人やね、この人は。

衣子：そうやねん。

直人：ちょっと彼が書いたものを読んだけどね、よく分かってるんだね。どこでそんな勉強しはったんかなと思うんですけど、実にいい事を言うてるね。華岳さんのことを書いた文章をみましたけど、実に的確なことを書いてるんですよ。

衣子：ファンやったからね。

飯尾：絵について、華岳さんと栄次郎さんが一緒にお話しになったりする機会は、やはり多かったんでしょうか。

衣子：そうですね。

直人：すごい文通があったよ。

衣子：屏風ができてるくらい。文通のお手紙を貼って。

池上：それは拝見したいですね。

直人：僕自身も文通の手紙、たくさんもらってます。これをどないしようか、と思って。

池上：貴重な資料ですよ。

直人：僕は美術館にあげたらいいと思うんだけど、美術館に入れてしまうと、特殊な時じゃないと出てこないでしょ。なんかもっといい方法ないかな、と思って。というのは、アメリカでも僕の親友だった人で、クリストファー・ウィルマース (Christopher Wilmarth, 1943-1987 年) という素晴らしい彫刻家がいるんですよ。

池上：カタログを見せていただきましたね。

直人：彼は自殺したんですけど、自殺した一年後に、ニューヨークの近代美術館がスケジュールを変えてでも彼の回顧展をしたんですよ。それくらい素晴らしい彫刻家なんだけど、僕は彼の手紙だとか、いろんなものを持っているんですよ。これをどないしようか思うて。今、ウィルマースさんのエステート (財団) のアーカイヴをしているのは、ハーバードのフォッグ・ミュージアム (Fogg Art Museum) なんですよ。そこにあげてもええねんけど、いろんな人がそうアドバイスしてくれるんだけど、入ってしまうと箱に入っちゃうから。その辺がちょっとデリケートなのよね。だけど華岳さんの手紙を、いつまでも僕が持っていてはどうすることもないしね。やっぱり美術館に行くんでしょうね。僕が心配することは、あげても、それをちゃんと保管ができるかっていうことやね。ただもう箱の中に入れて腐っていくっていうんだったら、考えもんやしね。それだったら、リンカーンの手紙みたいに、ひとつずつ額に入れて、オークションに出して、どうぞって。そういう考え方もあるわね。そうした方がたくさんの方がエンジョイできるってこともある。今それでちょっと悩んでる。どないしたらいいか。

池上：難しいですね。

直人：面白い、手紙でも。実にすばらしい手紙があるんですよ。字なんかね、素晴らしいですね。これをもうちょっと人がみれるように。あんな字かける人いないでしょ、今は、本当に。兵庫県立美術館は。

飯尾：ありがとうございます (笑)。そんなお話があれば、本当に夢のようですけども。

直人：ちょっとそれを考えたいですね。持っている、ということにも、苦しみがあるんですよ。面白いですね。

池上：責任というか。

直人：そう。非常にお金持ちな人たちもね、我々からみたら羨ましいなっていうことなんだけど、お金持ちになると、それだけの分の苦しみがあるそうです。子供たちがいてどないしようか、という。で、子供たちはやっぱり喧嘩するじゃない。その辺が非常に面白いわね。持ってるとやっぱり、苦しみがあるんですよね。じゃあ今日はここで区切って。ちょっと疲れませんか？

衣子：いえ、大丈夫。

飯尾、池上：長い間ありがとうございました。

中川衣子オーラル・ヒストリー 2009年3月28日

宝塚市、宝塚ワシントンホテルにて

インタビュアー：飯尾由貴子、中川直人、池上裕子

書き起こし：関根佳織

池上：それでは、中川衣子さんに二回目のインタビューを行います。

中川衣子（以下、衣子）：「衣（きぬ）」っていう名前はね、京都で生まれたけど、実家が五郎兵衛さんの神戸だからね、籍を入れるのは神戸で。そのときに五郎兵衛さんが「女の子に『子』は不必要だ」と。せっかく華岳夫婦が私につけた名前を、五郎兵衛さんが「子」を消しちゃったの。

池上：ご両親がつけたお名前は「衣子」さんで、「子」は必要ないということで戸籍上だけ「衣（きぬ）」というふうには。

衣子：そうそう。

中川直人（以下、直人）：京都は染織、衣（ころも）の町でしょ、それだから衣（きぬ）ってつけたんでしょ。

衣子：かもね。お父さんはその方が綺麗と思ったんよ。でも五郎兵衛さんはだめやった。

直人：「中川衣子」の方が僕はいいと思うけどね。

池上：素敵な響きですよ。

直人：「中川衣」っていうと何となく、ちょっときついね。

衣子：だけど戸籍は、五郎兵衛さんが京都から預かって役所へ行くときに、勝手に「子」を消しちゃった。（華岳は）怒ってたけどね。

直人：さっき、この絵のこと話してたんだけども。（注：《冬の山》、1935年、『村上華岳』展図録、京都国立近代美術館、2005年、186頁。以下、「図録」と記す）。

衣子：ちょっと（印刷が）黄色っぽいね、これ。

直人：ちょっと黄色っぽい。この白のね。

衣子：こんな真っ白じゃなくて。

飯尾：昭和10年。

衣子：筆が滑りやすいのかな。

直人：この絵を見るとね…… いかにも冬の山を抽象化された感じで。

衣子：木枯らしが吹いている感じやね。

直人：素晴らしいよ、ほんとに。何度見ても素晴らしい。こういうリズムのある線は、中国とか日本の絵にも絶対に見られないですよ。この辺が華岳さんの近代性っていうのかな、本当に感じますよね。音楽的に捉えてるでしょ。華岳さんが『画論』で言っているのは、ダ・ヴィンチ (Leonardo da Vinci, 1452 - 1519 年) が《モナリザ》を描いていたときに、隣の部屋で、静かに音楽家が何かを弾いていたんですよね。静かに。華岳さんはその例をとって、一枚の絵を見ると、「ひとつのいい音楽を鳴らしてごらん」って。

衣子：やってみました。

直人：やってたでしょ。音楽とイメージが一致すると、それは非常に素晴らしいと自分は思う、ということを書いておられましたね。

池上：本当にカンディンスキー (Wassily Kandinsky, 1866-1944 年) のような。

衣子：機嫌のいいときに。

直人：機嫌のいいとき。ああ、そう。どんな音楽だったの。

衣子：そうねえ、ドビュッシー (Claude Achille Debussy, 1862-1918 年) の「海」とか。一人でおるときに、ベッドの上でその音楽でこういう風になんかやって「機嫌がいいんだな」と思って。

直人：お母さんね、この絵みるとね、中国の唐紙でしょ。黄色いやつでしょ。

衣子：これは黄色い紙。

直人：これが非常にブルーに見えるんだけどね。墨にブルーを入れているのかしら。あるいはそういう墨を持っていたのかな。

衣子：そういうのは、母がお皿に命令通り溶いて。それが手助けの大事な要素やったね。

直人：これ(《冬嶽図》、2005年図録、215番、207頁)は1937年。この作品もすごいですよ。筆の動き見て、これ。

衣子：むちゃくちゃみたいね。

直人：むちゃくちゃな線なんだけど、僕の大親友で、アメリカでは非常に尊敬されている作家でね、ジェイク・バーソート (Jake Berthot) っていうんですよ、彼にこの本もあげただけけれども、非常に傾倒しているんですよ、華岳さんに。「こんな絵を描く人は、僕は今まで知らなかった」って。ジェイクさんの作品見てごらん。彼はこういうことを一生懸命やろうとしている作家なの、ずっと前から。ところがこれを見てね、大ショックしているの。こんなことをしていた作家がいるとは知らなかったみたい。僕のスタジオによく来てね。華岳の絵たくさんあるでしょ、本なんか。それを見ながらね、「This is incredible!」って、2時間くらいこうして

研究しとんねん。

衣子：聴濤先生（聴濤襄治、1923-2008年）もこういうのを見たら、どっちかいうたら抽象の世界でしょ。あの先生とはなんか通じるところあったんやね。

直人：こういうダイナミックな線とか、責任感のないような点があるでしょ。ポンポンと。これは近代的な考え方の作家しかできないよ。これなんかもすごいでしょ（《山嶽図》、1938年）。ほんとにすごい作品だと思う。何を考えているのかなと思うぐらい不思議な作家やね、この人は。日本にも中国にもこういう線を描いた人はいません。面白い人だ。

飯尾：「線は人格の現れである」ということも画論の中で語ってらっしゃいますし、線ということに関して非常にこだわってらっしゃった、ということは言えるんでしょうか。

直人：彼はね、「東洋の表現描写は線の描写である」と言っていましたよね。彼はウィリアム・ブレイク (William Blake、1757-1827年) だとか、素晴らしい西洋の作家も好きなんだけど、「私はだんだんと、東洋のこういう線の絵が非常にありがたいと考えるようになりました」って言うてね。

飯尾：先程の紙の話ですけれども、にじみの少ないアート紙のようなものを使ってらっしゃったりですとか、唐紙にわざとにじませて描いたりですとか、そういうのは自分の表現の方向によって使い分けてらっしゃったんでしょうか。

衣子：これはやっぱり、この紙が上等の紙と違うから、こういう風に、にじんで出てくる。

直人：でも彼は狙っているわけよ。そうでしょ。いろんなことしているんですよ、この人。いろんな実験してるんだよね。

衣子：生きてたら仲良くなれそうだな。

直人：僕と？ そりゃそうだよ。僕と比べたら、華岳さんの方が遥かに上だから、喧嘩にならへんねん、これ。

衣子：でもおこりんぼのところが似ている。

直人：そうですか（笑）。僕はそんなに怒らへんよ。

飯尾：ひとつお伺いしたかった作品がありまして、この《紅葉の山》（1939年、図録245頁）という作品なんですが。これは珍しく赤を、朱をわりと使っていらっしゃって。ほんとに最晩年の作品なんですが。他の山の絵と少し趣の異なるような印象を受けるんですが。

直人：これ1939年でしょ、華岳さんが亡くなられた年ですよ。これ見るとね、抽象表現主義者たちのやったような、非常に表面的な絵で。上から下にすーっといくと、奥行きがあんまりないんですよ。いわば、ロスコ (Mark Rothco、1903-1970年) みたいな作品よ、これ。分かる？

池上：そうですよね。色面がちょっと浮いてくるような感じで。

直人：そう。線がきちっと入ってね。面白い作品だと思ったよ。

飯尾：この作品を制作されているときのエピソードですか、思い出、印象などは。

直人：あなたが17歳の時だ。

衣子：出来た時しか見せないからねえ。

飯尾：こちらが最後の作品と……

衣子：やっぱり家に置いときたかった。ほんとに自分の快心の作は常に見ていたいから。

直人：そうですね、それは僕と一緒に。売りたい作品があるんですよね。売った作品もあるけれども、僕自身も「売らなければよかった、ちょっと失敗した」いう作品が何点か。

池上：ではこの《紅葉の山》は本当に快心の作で、手元に置かれていた作品なんですね。

直人：あの安い、黄色い紙に描いてる。

衣子：ほんとに安もんの紙。

池上：アート紙っていうのも、高価ではないんですか。そのにじまない方の。

直人：あれも安い紙だろうな。

衣子：アート紙？ あれも安いと思う。

飯尾：普通の紙ですね。伺った話で、華岳画伯は何枚も描きかけの絵をアトリエにかけていらして、眺めながら少しずつ手を入れていかれたと聞いたことがあるんですが。そういうような制作、アトリエっていうのはそういう何枚も描きかけの絵が……

衣子：アトリエって言うほどのもんじゃないですけどね。アトリエみたいなん、持ってないもの。

直人：どういうこと、それは。ただ家の一室で？

衣子：そうそう。

直人：自分の瞑想する部屋と、絵を描く部屋と隣同士、っていう感じ。

衣子：半病人みたいだから、あいだはほとんどベッドの上。

直人：病弱でね。この頃特にそうだったね。最後の年だもんね。

衣子：家に「広縁」って、縁の広いところがあって。そこが絵を描くところ。お部屋の中じゃなく。縁側に広

い縁があるでしょ。そこにシート引いて、そこで。

池上：お天気が良いときによく制作をされてましたんですね。

衣子：そうやね。

直人：華岳さんは、こういう題名にも、ものすごくエネルギーをかけたみたいね。自分でこういう題名を作る。

衣子：辞書がとにかく、いつも必要だった。

直人：非常に、独特なタイトルを作ったんですね。その題名を考えてる、一番いい場所はどこだったの。

衣子：その広縁の縁側。

直人：縁側で、ポータブルのトイレがあったわけでしょ。

池上：おまるですか。

衣子：昔のおまる。

池上：その上でタイトルを。

衣子：うん。そのときが一番冴えて、良かったん違うかな（笑）。可笑しい、ほんとに。家にトイレが3つも4つもあるのに、家のトイレ入ったことないの。

池上：おまるを愛用されてたんですか。

直人：一番困ったのは……

衣子：ママ。

直人：ママでしょ、それをクリーン・アップする。

衣子：とにかく朝起きたら、お母さんが一番にしなきゃなんないのは、おまるを抱えて、トイレへ持って行って、そこで捨てて、タワシで洗って、綺麗にする。それが一番の仕事。

池上：聞いたことがない話ですね。

衣子：私も「どうしてトイレ行かないのかなー」と思って。

直人：考えるとところだったんだ。フランスの巨匠の彫刻家、ロダンの《考える人》ってあるでしょ。あれもトイレ座ってたんちゃうか。《考える人》。

衣子：なんとなく私らはクスクス笑ってた。

直人：だけどそこで《懸崖夏景図》（1939年、図録244頁）っていう、こういうのを考えた。

衣子：懸崖（けんがい）ってあるでしょ。鉢を高いところに置いて、菊をずーっと下へ向けて（咲かせる）。あれを「懸崖」っていうの。菊作りの人は「懸崖の菊」っていうの。

直人：そういう題をおまるに座りながら考え出すんだな。

衣子：絶対に辞書が必要。

直人：どんな辞書ですか、それは。

衣子：なんだかこんな辞書。

直人：まあ、奇人ですね、ちょっと。ちょっとそういうことをする。こういう題でもね。これはどういう風に読むんですか（《巖頭黄昏》、1939年、図録247頁）。ガントウかな。オウコンっていうの、こういうの。

衣子：これなんか知らんね。これは黄昏。

直人：今ちょっと気づいたんですけど。これも唐紙だと思うんですけどね、この黄色が全部違うね。いろんな唐紙を探しておられた。色味がちょっと違うのかな。ものすごい黄色っぽいね。

池上：この辺も黄色いですね。

直人：面白いね。ずいぶん違うんだな。これも相当の黄色いな。こんな色とは。これは写真の具合なのか。

池上：写真の写り具合でもちょっと変わるでしょうね。

衣子：黄色い紙に青いものをこう描いてるんじゃないかな。ほとんどやっぱり唐紙。

直人：唐紙だね。ほとんどね。

池上：ちゃんと見ていくと圧倒的に多いですね。

衣子：にじみ具合が良いんで。

直人：多いですね。

飯尾：これは最後の作品、絶筆とされている《牡丹図》（1939年、図録251頁）ですね。牡丹もお好きな花でよく描いてらっしゃいますよね。

衣子：うん。牡丹の花が好きみたいだね。

直人：どうしてだと思えます。

衣子：これはほんとに、花が咲いたらこんな大きいからね。とにかく艶やかで、派手な花やったな。

直人：これ完成したんだね、一応。ハンコを押してるから。だけどサインはしてないんだ。

衣子：ドーサ引きをして、それは自分でやったみたいよ、死ぬ日に。

直人：彼、この絵を描いたときに、もう自分は死ぬと思ったん違う？

衣子：かもわからんね。

直人：どうしてそう思うかって言うと、このイメージね。この鳥が…… この形がね、鳥の翼に似てるんですよ。

衣子：これは葉っぱ。

直人：そうだけどね。いかにも「飛んでいく」っていう感じに僕は受けるのよ。華岳さんがその自分の死を感じていたん違うかな、と思うわけ。この絵を見るといつでも僕の目はね、ここに行かないですぐにここにいっちゃうわけ。

飯尾：翌日もこう描き続けるつもりで、ドーサ引きをして、その夜にお亡くなりになったということですけど。

直人：そのときの喘息、覚えてますか。喘息も頻繁に数が増していったわけ？

衣子：季節的に。気候の変わり目とかね。

直人：いつだったの。彼が亡くなられたのは。冬るとき、夏？

衣子：忘れてる。いつかな。

飯尾：11月では。

衣子：やはり気候の変わり目がちょっとね。でも変な写真(図録296頁、左)があるでしょ。ベッドの上でこんな、お化けみたいな…… あれそっくりね。

池上：いつもああいう感じで、ベッドの上いらしたんですか。

衣子：ベッドの上に掛け布団を4つぐらいに折って、高くして、それに寄りかかってね。

直人：苦しかったんだな。

衣子：チアノーゼなんか出ましたね。爪なんか紫色。お医者さんは、それが出てきたら注射を打つ。

直人：息ができなかったわけ。

衣子：みんなが寝た頃ぐらいがね。冬なんかでも空気が非常に大事やから、広縁の縁側のところの戸を開けてたんね。私は一応寝て、母だけ起きてて、そしたら2時ごろぐらいかな、母が私を呼んで。私は一番お姉ちゃんだから。そしたらベッドの上で布団を積んでいたところに寄りかかって、苦しんでね。あーこれはいけないな、と思って。「電話」って言って。西村先生という、先生のところに。

直人：その人はかかりつけの先生？ 近くに住んでいたの。

衣子：県庁の近く。兵庫県庁のね。先生はすぐ飛んできてくださったな。15分くらいで。じいやがいましてね。じいやが門を開けて、先生が入って来たときに、（華岳が）すーっと静かになった。でも先生が脈を見て、心臓に針を。ああいうことできるのかな、って思ったけど、心臓に直角に針を入れて。「大概これで戻る」って先生が言って。でもそのときばかりは戻らない。何回もやってて、（過去には）ほんとに戻ってきたんですけどね。そのときだけはもう戻らない…… あっという間。だから苦しかったと思うけれども、ひょっとしたら楽だったかもね。その横にこれをドーサ引きしたのをね、ちゃんとやって。ドーサ引きってなんですかね、私はそのとき分からなかったけども。

池上：にじみ止め、というものですよね。

衣子：ですよね。なんかそれを自分で気に入った作品かなんか、自分でやってみたいよ。だから夜中12時ごろからやってたんじゃないですか。

池上：描いてからその上にドーサ引きをするってということもあるんですか。

衣子：膠を溶くの？ あれ。

池上：そうだと思います。明礬かなんかで……

衣子：こんな小さな、瀬戸物のお鍋みたいなので、ぼきぼきと折って、火にかけて溶かす。

直人：亡くなられてから、デスマスクなんかとったん違う。

衣子：とった。それは業者の人かな。

直人：どうしてとったの、デスマスク。誰が考えたの。

衣子：華岳会の人じゃないかなと思う。

池上：それはどこかに残ってるんですか。

直人：それをちょっと今聞こうと。

池上：そのデスマスクは、今どちらにありますか。

衣子：空襲で。

直人：ああ、焼けちゃった。

池上：焼けてしまったんですね。残念ですね。

衣子：よくできてた。見たら部屋を逃げようかと思うぐらい(笑)。足が動かなくて後ろ足引っ張られるぐらい、お父さんのデスマスクは良くできてるの。それくらい怖い。怖かった。もちろんデスマスクを作るときは、「家族の人は出てください」って。白い型取りをするでしょ。それでできてきたらね、ぞっとするくらいうまくできてるね。ちっちゃい妹なんかも、怖いからお部屋から出ようかと思うのに足が行かなかったぐらい。ベートーベンだって、よくできてるもんね。

直人：あんまり聞かないけどね。デスマスクを作るというのはね。

衣子：誰がそんなこと言い出したか知らないけど、「デスマスク、とりましょう」って。

直人：ということは、華岳さんの存在を、非常に重要な画家として思ってた人たちがいたんだね。

衣子：そうかもわからんね。

直人：だけど葛藤の人生だな。考えてみたら、苦しかったね、非常に。

衣子：50歳まで。

直人：第二次大戦の始まるちょっと前でしょ。大戦が始まったらもう、どっちみち……

衣子：第二次大戦いうたら真珠湾のこと？

直人：そうそう。

衣子：そこまで知らないよ。

直人：もちろん。だけど、ある意味では良かったという見方もあるわね。よう生きてなかったでしょう。

衣子：あの人の戦争の体験は支那事変、それから南京の……

直人：華岳さんは、中国には行ったことあるの。

衣子：1回。

直人：インドにも行きたかったの？

衣子：それは行きたかった。

直人：そうですね。

池上：中国にはご旅行で行かれたんですか。

衣子：山を見に行ったのと違いますか。お弟子さんなんかいっぱい連れて。土田麦僊さんとか、入江（波光、1887-1948年）さんとか、国画創作協会のグループと一緒にいったと違いますか。

池上：昨日、アメリカにも本当は行きたいと思っていたら、と伺いましたが。

衣子：あの頃、親戚がね、家族でアメリカへ移住した人があるんですよ。伊丹の辺のね。写真にうつってる、アメリカ行った人が。

池上：ご親戚を尋ねて行きたいと思ってらしたということですよ。

衣子：千鶴というおばあさんの兄弟。

直人：（カタログを見ながら）昨日の書は、これでしょ（《寒巖青松》、1933年、図録254頁）。今度家を建て直すからね、昨日、色々ごそごそしとったんよ。これがでてきた。ものすごく痛んでんのよ。

衣子：早く直さんと。カビ生えてんのよ。

直人：虫が食べとんのよね。

衣子：糊を食べてるみたい。

直人：だから僕、ニューヨークに持って行こうと思って。メトロポリタン美術館 (The Metropolitan Museum of Art) の大場さんってご存知。

池上：修復の方ですか。

直人：あの人に治してくれって言おうと思って。これはまだ、（この作品が）健康なときの写真や。

衣子：墨の色がねえ。これなんかみんな、アート紙。アートペーパーっていうんですか、つるつるの紙。

池上：すべるように書いてらっしゃる感じですよ。

衣子：筆の先をちょっとこうカットしてね。

池上：カットするのは、そのほうが字が書き易いからそうされてたんですか。

衣子：でしょうねえ。すべりやすいんでしょうね。

直人：あるいは特殊な、自分の好みの形がこううまく……

池上：書きやすくなるんですかね。

直人：そうそう。ほとんどの絵描きがね、僕はそうじゃないけども、だいたい下手な絵描きがやることやねんけども、一所懸命絵を描いてさ、なかなかうまくいかない絵をね、最後の手段としてね、とっておきのブラシがあるんですよ。こういう無茶苦茶な。それでくっつくと、なんとなく形がいくような、そういうシークレット・ウェポンが。

池上：伝家の宝刀。

直人：そう、伝家の宝刀（笑）。

衣子：なんか難しい言葉たくさん書いている。

直人：そうやね、くねくねくね、と書いて。

衣子：これはね、何回も書いていたけど、これは一休さんの詩みたいよね（《春衣行路》、1935年、図録256頁）。

直人：そや、一休さんやね。

衣子：晩年には書なんかちょっと凝ってたからね。

直人：そうやね。こういう松も描いたのかしら。描いたんだな、これ。最初ちょっと薄く書いてね。銀箔かなんか入れて、ちょっとやったんだな。

衣子：墨の色が綺麗から。

直人：綺麗ね。昨日見つけたやつは、これが非常に綺麗に残ってる。ここに行くとちょっと駄目なんだな。僕がね……

衣子：これが《聖者の死》（《聖者の死（下図）》、1918年、図録267頁）、これが関東震災で焼けた。

直人：焼けちゃったんだ。あっそう。だけどこれ京都市美術館って書いてあるよ。

池上：この完成作が焼けてしまったということですか。

直人：この完成作やな。そやね。これは残ってるんだ、きっと。

飯尾：これはジョットとか、イタリアのルネサンス絵画のような作品を参考になさったとか。

池上：ジョットがお好きっていう風に『画論』でもずいぶん書かれてますけれども。

衣子：好きみたいねえ。

池上：昨日、日本画の先達では、特に影響を受けた画家はいらっしゃらなかったというふうにお聞きしましたが、逆に西洋の画家からインスピレーションを受けるということはあったんでしょうか。

直人: いい質問やね。最初は華岳さん、ある程度若いときの《夜桜之図》(1913年、図録 32-33 頁) なんか、非常に浮世絵の影響を……

衣子: 若いのにお芝居なんか好きみたいやったね。京都にいたからか知らんけど。芝居の絵なんかもあるでしょ。(注: 《京の春》、《演劇 定九郎》、1914年、《操り人形道成寺》、1916年、《舞妓》、《二人舞妓》、《都踊り》、《文楽人形》、1918年など。図録 34-35、46-48 頁)

直人: ありますね。踊る舞妓の踊りだとか、文楽のちょっと描いたやつもあるわね。だけど、日本の作家で非常に彼が好き作家っていました?

衣子: 学校の先生は、竹内栖鳳(1864-1942年)先生やね。

直人: だけど、絵描きとしてさ。例えば雪舟(雪舟等楊、1420-1506年)とか雪村(雪村周継、c.1504-1589年)だとか、そんな人。あんまり書いてないね、『画論』にも。特に彼は中国の作家に非常に惹かれてたん違うかな。僕なんか好きなんですけどね、八大山人(はちだいさんじん、1626-1705年頃) っているでしょ。

衣子: 知らん。嫌いな人は一人知ってるけどね。

池上: どなたですか。

衣子: そんなん言うたら悪いでしょ。

直人: もう死んでる人?

衣子: そりゃもういないと思う。

直人: じゃあ、かまわへんやん、別に(笑)。

飯尾: 聞きたい、是非。

衣子: 嫌いやった人はあったみたい。

直人: 絵描きとして、一応成功しているからかな。誰だろう。別にかまへんよ。僕にちょっと言うてみい(笑)。

衣子: なんか、嫌いみたい。

直人: 2、3分考えとき。誰かを傷つけると思っているわけ。

衣子: そう。

直人: ああ、そう。じゃあ、もう言わなくてもいいよ。僕は小さいとき、この絵(《六甲の雪》、1936年)を見て育ってるのよ。

衣子：これは六甲山。

直人：そう。この辺が好きだったん違う、これが。

池上：たしかに六甲の山並みですね。

衣子：阪急電車に乗ったらね、必ず山のほうが見えるほうの席に座って。

直人：あった、出てきた。

衣子：これは《巒峯春雪之図》じゃないの。(1933年、図録130頁)。冬になって、山の頂に……

直人：だけとお母さん、この山のところ、昨日見てたでしょ、みんなで。同じ山でしょ。だけどこれ、こんなに黄色じゃないよね、写真良くないね。これ鉛筆で書いてあるんですよ、墨じゃないですよ。僕が興味を持っていたのは、この女の人(《女の顔 婦人像(1-4)》、1919年、図録269頁)。これが誰かっていうこと。なんていう名前の人？

衣子：名前は分からない。

直人：この人は華岳さんが神戸ばあちゃんと結婚する前に付き合っていた人？

衣子：いや、知らないねえ。どなたかの紹介やね。

直人：1919年だから、彼きっともう結婚していたよね。

衣子：大学の先生の奥さんだとかいうこと。

直人：何度も描いてるからね。

衣子：母が言っていたんは、ちゃんとした大学の先生の奥さんだって。

直人：そう。じゃあ、お母さんは別に異議があったわけではないんだ。華岳さん、別にこの人とラブ・アフェアーをしていたわけではないの。

衣子：……は、なかったみたい。

直人：華岳さんは女の人好きだったの。

衣子：そうやろねえ(笑)。でも時々、お母さんがやきもちやいてたって、なんかね。あんな偏屈な親父さんだけでも、子供には自分をパパとさせてたの。

池上：ハイカラですね。

衣子：パパはね、悪いことゆったらね、「どこかの彼女の耳を触ったら、兎の耳みたいに柔らかいよー」って、

お母さんに(笑)。私は子供というか、15歳ぐらいやから何のことか分からなかったけれども、お母さんはちょっとやきもちを……

池上:『画論』の中にも、「愛の告白というもののほど、自分を当惑させるものはない」というような文章があって、告白をされたのかなって思ったんですけど(笑)。

衣子:おませだからね。

池上:おモチになったんでしょうか。直人:この絵(《自画像》、1922年、図録271頁)も僕が育っていたときにしょっちゅうかかってたんですよ。

衣子:これ油絵。

直人:華岳さんはこの1点だけでしょ、あ、これも油絵かな。だけど自画像を油絵で描いたっていうのは面白いね。線で描かなくて。油絵独特の、なんかを追求できるような立体感を持たしてね。

池上:東京美術学校なんかでは、卒業制作が油の自画像ですよ。そういうのを思い出したりしたんですけど。

直人:こないだ僕のニューヨークのスタジオに、インドの人が来ましてね。この絵(《タゴール像》、1924年、図録270頁)を見せてあげたの。芸術家じゃなくて、科学者だったけど。これ見て、すごく感心してね、これ(タゴールの銘)を読んでくれたんよ。即座に、これはベンガル語だって。ベンガルはインドの一番東にある町だそうです。そして、「インドでは知識人はみんなベンガルからでてくるんだ」って。「ここから出てきた人は一番頭がいいんだ」って。「あなたもここから出たの」って言うたら、「僕はそうじゃないけども、タゴールさんもここから出てる」って。

池上:これは昨日おっしゃっていた、タゴールが講演に来たときに、聞きに行かれたときに描かれたものですね。

直人:そうですね。これも素描やね、鉛筆やね。

衣子:(カタログを見ながら)こんな様なものをね、ちょこちょこベッドの上で思いついて書いたり……こんな中で弟子がいたりしたでしょ。そんなかで一人ちょっと曲者がいて。

直人:盗んでいくわけ?

衣子:あれが来るとね……

直人:絵がなくなっていく。

衣子:なんかちょっと……分かってたみたいね。

直人:華岳さんは、表具もちゃんと考えていたのかな。

衣子:表具屋さんに指示してるってこと? そうそう。

直人：こういう風にしてくれ、とか。

飯尾：表具の材料にする古裂を集めてらっしゃったりとかは……

衣子：裂はあんまり集めてなかったと思う。

飯尾：お好みの傾向というのはおありだったんでしょうか。

衣子：やっぱり好きずきはあったと思うね。

直人：彼はある意味で、宗教家っていうことを自分で意識していたと思うんですけどね、お寺なんかには行かれました、彼は。

衣子：行きません。

直人：行きません。面白いですね。

衣子：信心はゼロです。

直人：これなんですか、これは。これは屏風ですか。

衣子：風呂先屏風かなんか。(《風炉先屏風(雲門胡餅趙州茶)》、図録 262 頁、《風炉先屏風(貼交)》、1936 年、図録 262 頁)

直人：こういうものを、藤岡さんがやったのかな。

衣子：うん、たぶん。

直人：藤岡さんっていうのは表具師の人でね。こういうのやったんだな。その藤岡さんの娘が、常一郎さんの奥様。村上暉久子さん。

池上：表具屋さんの娘さんにご結婚をされたんですね。

直人：そう。表具さんの娘で、いいおばちゃん。それで華岳さん、手紙はよく書きましたね。すごく書かれたですね。色んな悩みをね。

衣子：口下手。

直人：大体描く人ってそうだよ。これが関東大震災でなくなった作品(《聖者の死》、1918 年、図録 284 頁)だ、これ。

池上：写真だけ残っているんですね。

直人：写真だけ残ってた、これ。ふーん。これは大きな作品だ。

衣子：東京の新橋まで運送屋さんが運んでいるの。それで震災が起こって、運送屋さんが東京までは運んだの。そこから消えてるから。まず新橋駅の倉庫に一応入って、そこで燃えたんだと思う。

直人：華岳さんは生きていた間に、東京でも展覧会を一度くらいしたん違う。していない？

衣子：晩年は、行きましたけどね。

直人：誰か亡くなられたでしょ。華岳のその……

衣子：土屋（楠熊）さん。

直人：土屋さんか。華岳会の、すごく華岳に傾倒していた人。それは高島屋かどっかで展覧会をやったんか。

衣子：そうそう、東京の。

直人：それはもう華岳さんが亡くなられてからやね。

衣子：いや、生きてる。

直人：やっぱり。だから言ったやん、東京でやったのかって。何年頃ですか、それ。

衣子：ちょっと知らない。私は連れてってもらえなかったからね。

直人：それでその帰りの車で足を踏み外して、土屋さんは事故を起こして亡くなられた。

衣子：汽車から落ちて。

直人：大変なパトロンをなくしたってということやね。

衣子：そうやね、一番の理解者だった。奥さんも亡くなられて、息子さんも亡くなられて、娘さんが一人。

直人：僕の最後の質問ですけどね、お母さんが華岳さんの作品を1点選ぶとしたら、どの作品を選びますか。どんな作品が一番頭の中に残ってる？

衣子：私、個人で？

直人：個人的に。例えばこの作品が一番なんていうか、自分に近いというか、好きだとか。

衣子：木枯らしの山。紅葉の絵。（《紅葉の山》、1939年）

直人：やっぱり、赤いやつ。あれ、取り戻さなあかんね、そしたら。

池上：さっきからおっしゃっている、まさにあの作品ですよ。それはどういうところが一番印象に。

直人：これですね。最後の亡くなられた年の作品や。これはどこの山なん。やっぱり自分の頭ん中の山だな。

衣子：でもこれとこれと、同じ山やん。

直人：似てるね。

飯尾：最晩年だとやはりご病気もあって、なかなか外にはスケッチなどには出歩かれないですよ。

衣子：はい、体の調子のいいときでないとは出かけられません。

飯尾：ご記憶にある山のイメージというのを描いてらっしゃる。

直人：彼は六甲の山へ行くときに、お母さんを連れて、あなたは薬箱を担がされて、山のところに登っていったわけやね。

衣子：好きな山は六甲の山と芦屋の山。芦屋では借家を借りまして、神戸の家と行ったり来たりして。時々芦屋に。ばあやを一人雇ってましてね、お世話さしてね。

直人：そこで泊まって。

衣子：私の学校がないときに芦屋に行って、芦屋の山を登って。

直人：よく行ったね、それ。

衣子：いやそんな、こんな山と違うよ。

直人：それ何、下駄を履いて行くわけ。

衣子：そう、年中和服やから。

直人：下駄でこう行って（笑）。それで……

衣子：下駄をお尻の下に引いて、風の音を聞いて。

直人：よっぽど風景のいいところでしょうね。いいところ見つけたんだな。じーっと考えてるわけ。写生もしなくて。あなたは何してたの。

衣子：おそばについてただけ（笑）。

直人：何時間もいるわけ。

衣子：うん。

直人：食べ物も持って行くの。

衣子：ちょっと。

直人：ちょっと持ってって。それで山を降りてきて、またちょっと描く。

衣子：その日、晩にできたら、夜中にいっぱい描いてるから。寝ないでやってるからね。ちょっとずつ小出ししてたんでしょうね。

池上：こちらの絵はどういうところがお好きですか。

衣子：これはね、やっぱり下地に山を描いてるんですよ。

直人：描いてますね。

衣子：それで後から紅葉を。

池上：赤い。

衣子：赤い。どっかのね、間違いかもわからないけど、お芝居の緞帳いうのありますよね、あれにこれを使わせてくれっていうてきたことがあったのよね。でもそれはできてない話かもわからない。

直人：絶筆の牡丹の絵と、この絵、何ヶ月くらい離れてるのか。同じ頃なのかな。これは最後の年ですよ。

衣子：まあ秋やね。同じ頃かな。

直人：そしたら牡丹だから、同じ頃だな。

池上：11月にお亡くなりになってますから、近い頃の制作ですね。

直人：だけど、華岳さんは秋だと思ってこういう赤い色を使ったのか、絵画的にそういう赤の色を使ったのか、そのへんが神秘的やね。山がさうとう深いですよ、見ているとね。

衣子：でも、これは技巧だと思う。だから先に下地に山を描いているでしょ。同じような山でしょ。真ん中にぽこってある、同じような山。何枚も描いて。そして技巧的にこれを描いたんと違うかな。

直人：これサインが入ってないね。判子が2つ、印は入っているけども。

衣子：落款だけ。

直人：落款だけだな。こういうの後で書くつもりだったんだろうな、きっとね。構図が非常に似てるわね。

衣子：おんなじ。だから色んなことがね、不可解なまま。急に死んでるからね。

直人：この『画論』を読むとね、非常な知識人やね、彼は。こういう文章、普通の人は書けないですよ。

衣子：こういうの出てるんですか。

直人：うん、『画論』。これはちょっとだけ現代的に直してる。僕の持ってるのはオリジナルのやつでね、ぼろぼろだけどね。

池上：相当色んなものを読んでらしたと思うんですけど、どういう作家がお好きだったとかっていうのは。愛読書などそういうものはありましたか。

衣子：彼の愛読書。

池上：はい。この思想家が好きだ、とか。

直人：ウィリアム・ブレイクだな。

衣子：ブレイクは何でか好きやったね。

直人：好きだったね。ダ・ヴィンチも好きだったね。それからジョット、セザンヌのこともちょっと書いてますよね。

池上：思想家とか、文筆家でお好きな作家というのはいらしたんでしょうか。

衣子：志賀直哉(1873-1971年)さんとか。文通もしてましたね。

飯尾：お写真が。(図録 296 頁、右)

衣子：志賀直哉さんと。

飯尾：昭和 12 年の写真ですね。

衣子：それから、武者小路(実篤)(1885-1976年)さん。

飯尾：岸田劉生(1891-1929年)が、関東大震災を避けて、京都に住んでた時期があると思うんですけども。

衣子：同級生ぐらいじゃないかな。

飯尾：ご交流というのはあったんでしょうか。岸田劉生は、本当に村上華岳のことを非常に高く評価されていたと書かれているんですが。

衣子：うん、好きみたいよ。華岳も、岸田さんとは本当に心を通わせてた人で。岸田さんも「自分が選ぶなら華岳だ」って言ったりしてくれて。

直人：それで聞いた人が「華岳って誰ですか」っていうて聞いたんだ(笑)。

衣子：名前が出たんは岸田さんのほうが先。

飯尾：手紙のやり取りとかもされてたんですか。

衣子：だけどその手紙は見つかってないね。

飯尾：入江波光さんが、華岳画伯が亡くなられた後に、作品を整理されたりとかという話を伺ったことがあるんですけども。

衣子：いらっしゃいました。

飯尾：生前からかなり親密にお付き合いがあったんですか。

衣子：なんでも打ち明けてた。

飯尾：国画創作協会のメンバーとしては、土田麦僊さんと入江波光さんというお二人。

衣子：あと、小野竹喬（1889-1979年）。それからもう一人……

直人：榊原紫峰（1897 - 1971年）さん。

衣子：紫峰さん。

飯尾：榊原紫峰さん。国展が解散した後もずっとお付き合いはあった。

衣子：だけどこの人は、京都から離れて神戸に隠遁したみたいだったから、ほとんど晩年は付き合いはなかったですね。でも入江先生とはしょっちゅう文通して、病気の悩みとか、制作の行きづまりだとか、色んなこと入江さんに話をして。

池上：制作が行きづまるってようなこともやはりあったんですか。

衣子：と、思うんですけどね。

池上：それはご家族にはあまり言われなかったんでしょうか。

衣子：私は聞いてませんね。

衣子：わりに何でも自分で決めてね、居候までおったんですよ。家の裏に物入れ、納屋があるんですよ。そこ改造してね、彼を住まわせてやろうと。

池上：それは画学生の方ですか。画伯を慕って来られた絵描きになろうとしてた方ですか。

衣子：この辺に写ってないかな。

直人：絵描きさんやね？

衣子：違う。変なおっさんやったけど。偉そうな顔して、いつもそばにいてたよ。(図録の写真を見て)これが紫峰さん、ひげの生えた人が。

直人：華岳さんはこう小さい人やったんやな。

衣子：小さいよ。小さくて痩せてて、ガリガリ。

直人：これ藤岡さんでしょ。

衣子：そうそう。そのこっちが林松竹さん。

直人：土屋さんはどの人？

衣子：土屋さんもこのとき死んでる。この髭の生えたのが宮崎安衛門先生、これがまあわりに親友みたいだったね。

直人：中川栄次郎はここにいないね。

衣子：いる。これ。

直人：いるいる、ほんとだ。面白いね。粋な背広着てるやん。おしゃれだな。

衣子：貿易屋だもん。

直人：おしゃれだな。ちゃんとここに、何ていうんですか、このポケットに入れるものは。

池上：ポケットチーフですか。

直人：うん、ちゃんとはいってるね、なんか。紳士ぶってんだな。

衣子：おしゃれだよ。いつも居候がちょこんと座ってたのにな。

池上：お弟子さんでなく居候の方がいらしたというのが面白いですね。

直人：ただで？

衣子：ただ飯食い。

直人：それがほんとの居候だな。

衣子：納屋にね、ちゃんと置もひいてね。

直人：よっぽど気に入ってたんだな、その人を。

池上：よくして差し上げてたんですね。

衣子：変なおっさんやったけどねえ。だから母は、「あれは食いついて離れへんの違うか」って。

池上：その方は、華岳画伯が亡くなられるまでいらしたんですか。

衣子：いや、勝手な人よ。(亡くなる) ちょっと前にね、「ええ人ができたから出て行く」って出てった。この中に、今いった水上さんというのがいる。

直人：これね。水上さん。

衣子：おるでしょ、哲。これは時々来て、ご飯食べて。

直人：それが居候？

衣子：いや、外部の人。もう一人、竹中っていうのは裏に住んでた。

直人：よっぽど気に入ってたんだな、華岳さんはその人を。

衣子：だからお母さんが、いつも博愛を衆に及ぼして、「一人やったら、かわいそうやから、哀れやったらみんな来い」って言って。私にご飯を持って行って。

直人：こういう、土田さんとか入江さんとかね、まだ絵がちゃんと売れなくて、みんな貧しい画家だったでしょ。

衣子：そうねえ。でもあの頃、土田さんは一番先にデビューしたと思うね、麦僂さん。

直人：彼は絵を売っていた。

衣子：それから榊原紫峰さん。竹喬さんもやってたね、小野竹喬さん。

直人：華岳さん、そういうほかの貧しい人たちに金銭的な援助もしたんですか。華岳さんはお金には困らなかったよね、五郎兵衛さんのおかげで。

衣子：そうねえ。昔は家作でおまんまが食べられたでしょ。借家がいっぱい作ってあるからね。家の周囲は借家ばかり。

直人：その借家の家賃は誰が集めたの。

衣子：じいや。そのためにじいやというのを雇って。

直人：嫌な仕事だろうね。

衣子：おじいさんばかり。

直人：締めくくりとして、何か聞きたいことありますか。

飯尾：締めくくりとしましては、最初の質問に帰ってしまうんですが、一番強く心に残ってるお父様の思い出というか、エピソードというのは。

衣子：いつもお父さんが私のことをね、夜でも、学校の都合があっても、試験があっても、とにかく私を引っ張り出すのに、お母さんがいちゃもんをつけてたわけ。勉強している学校の課題とか、そんなもん全然聞かえてない。で、私はもう、お父さんがすーと部屋の前に来て、「衣ちゃん」っていったら、もう何もできなかった。トコトコついて行っちゃって。「あんたも甘いから」って、お母さんいつも言ってたけどね、「私しかいない」って。母はいつも「子育てだけしたい」って。「絵の奥さんは別にもらってください」って言ったくらいやから。「私はできません」って。子供が4人いるでしょ、子供のこと、学校のこと、そういうことで大変だから、「絵専用のお嫁さんをもらってくださいって言ったら、もうお父さんはぶーっとふくれた」言うてましたけどね。

池上：でもある意味、その役割を衣子様が果たされてたっていうようなところがあって。それはお二人の絆ですよね。

衣子：でもね、自分のこと言ったらおかしいけど、うちの近くの人が「中川さんは90歳だけどね、いつもちゃんとしてるね」って言うてくれて。「そう思う？」って。その奥さんは、「うちのお父さんなんか、おじいちゃんになっちゃって、朝の食事もね、自分でやってもらってるの」って。そんなんしたらあかん。で、私の生い立ちを話して、うちのお母さんは夜になってお父さんともめごとがあって、けんかしてても、夜の11時になっても、着物の襟、襦袢の襟が汚れてたらね、みっともないから、鼻水たらしてでも着物の襟を付け替えたり、いつも気配ってね。「絵描きさんの奥さんやから、ちゃんとしてるんや」って、母からいつも言われてたからね。「私もまあ、そこまではいかないけれども、女の人は目をつぶるまで、気を抜かない方がいいのよ」って言ったら、「そうかしら」って。「私は朝起きたら『朝の食事はまだかー』って言うから、『自分の食事ぐらい、パンを焼くだけだからやってくださいよ』言うてね、ほっとくの」って言うから、「そんなことしたらあかん」て。私はいつもお母さんがね、お父さんが画家だから、鼻水たらしても、汚れるから揮発（油）でふいたり。揮発でふくなんて考えられへんでしょ。さっとやってた。女中さんとか召使さん、そういう人の示しのためにね、自分がやっぱりこうせないかんって。それだけ。

飯尾：ありがとうございました。

直人：よかったね。これ、ひとつの記録になったからね。

池上：ほんとに貴重な話がたくさん聞けて、ありがとうございました。

衣子：だから母が亡くなってね、ちょっと非業な最期だったんですけど、お葬式には華岳会の人なんかたくさん来られてね。「たいてい先生は立派な人でも、奥さんのお葬式はひっそりしてさびしいもんだけど、あなたのお母さんのお葬式にはびっくりしました」と。

池上：たくさん人がいらした。

衣子：何百人の人が惜しんでね、送ってくれた。

直人：いいおばあちゃんだったよな。すごく親切な人やったね。

衣子：それだけが……

直人：ありがとうね。

飯尾、池上：ありがとうございました。

この冊子は2015年3月31日現在、日本美術オーラル・
ヒストリー・アーカイブのウェブサイトで公開されている
中川衣子オーラル・ヒストリーを印刷したものです。インタ
ビューをより正確なものにするために、修正あるいは追記さ
れる可能性があります。最新のヴァージョンはウェブサイト
(www.oralarthistory.org) をご確認ください。

This booklet prints the oral history interview with
Nakagawa Kinuko published on the website of the
Oral History Archives of Japanese Art as of March
31, 2015. The interview can be revised or annotated
for the purpose of accuracy. For the latest version,
please visit our website at www.oralhistory.org.

中川衣子オーラル・ヒストリー

インタビュー：飯尾由貴子、中川直人、池上裕子

デザイン：西岡勉（フォルダ）、青木意芽滋（冊子）

発行：日本美術オーラル・ヒストリー・アーカイブ

発行日：2015年3月31日

Oral History Interview with Nakagawa Kinuko

Interviewers: Iio Yukiko, Nakagawa Naoto, and Ikegami
Hiroko

Design: Nishioka Tsutomu (folder) and Aoki Imeji (booklet)

Published by: Oral History Archives of Japanese Art